

名誉会員の推挙に寄せて



岩田 正美 新名誉会員

【本学会役員歴】

第20期 理事（3年）

第21期 理事（3年）

第24期（第3期） 会長（2年）

第25期（第4期） 会長（2年）

役員通算4期（10年）



2022年春の日本社会福祉学会大会において、名誉会員への推挙をいただきました。

もうそのような年齢になったのかという、やや苦い自覚とともに、名誉会員＝「学会のそうそうたる長老」というイメージからいうと、私でいいのですか？という思いも去来します。大会の開催校の下っ端としてお手伝いしていた時は、まさに日本社会福祉学会を作り上げてきた著名な先生方たちが長老であり、お茶を運ぶのにも気を遣った記憶があります。それらの先生方のようになったかと問えば、いやいや、まだまだ、というところでしょうか。

それでも、学会の役員活動では、多少のお手伝いはできたかもしれません。

思い出深い一つは、学会誌『社会福祉学』の問題でした。今でこそ、学会誌の内容は大変水準の高いものになっていますが、それは会員が投稿し、これを査読して、水準を高めたものを掲載していくという仕組みを確立させたからに他なりません。私が機関誌担当の委員になった当時は、特集、学会シンポジウム、自由投稿などの仕分けで、「企画もの」が中心だったと思います。自由投稿についても厳しい査読を通すわけでもなかったため、学会誌というよりは商業誌のような作りだったと記憶しています。社会福祉分野は、書ける場所（依頼）が多いので、学会誌に出さなくても、業績は上げられるというような風潮もあったかもしれません。ところが次第に、研究者の論文も査読つきかどうかで評価が異なってくるようになったこともあって、本格的な学術誌に衣替えし、査読制度も査読者の質を上げて、内実のあるものにしようという機運が高まっていました。ちょうどその頃編集委員を仰せつかったので、委員会では査読についてずいぶん議論しました。査読は平均点の論文を発掘するけれど、天才は落とす可能性もあるとか…。議論が白熱して、研究とは何かという問題に収斂していった、とても面白かったのを覚えています。この経験があるので、査読の仕事は、今でも大体お引き受けしています。査読はやや遅れた感がありましたが、査読制度についてわかりやすく学会誌に掲載したり、のちには研究倫理指針の策定など、むしろ他の学会をリードするような方向にいったことは、嬉しいことでした。

もう一つの思い出は、2014～2016年に第四期の会長を引き受けた時に、学会の事務局を全面的に外部委託にするという仕事をせざるを得なくなったことです。実は2012年に突発性難聴で聴力を失ったこともあり、なるべく代表のような役職にはつかないようにしていたのですが、そこを某会員（女性）に見咎められ、まあ、しょうがない、女も逃げていけばかりはダメね、ということで泣く泣く引き

受けました。当時、学会誌や会員管理などは外部委託をしていましたが、学会の自前の事務所が四谷にあり、そこに非常勤の職員をお願いして運営していました。これを全面委託にする方向での検討が始まりました。職員の方達とは長年のつながりもあり、事務所は会議室にも使えましたから、なぜ全面委託かという批判が当然あり、しかし、会員規模、一般社団法人への組織替えなどから考えると、そうせざるを得ない状況がありました。問題は、全面委託できる業者の選定で、このため、プレゼンや書類審査に時間をかけ、理事の間で何度もディスカッションを繰り返しました。もちろん、なんとかやり終えたのは、まったくこの期の理事の方達が一丸となって推進したからで、私はただ心配していただけかもしれません。

ともあれ、そのようなことで、日本社会福祉学会は、私にとって一つの学会という以上の存在であり、今後も質の高い学術団体として存在意義を発揮されることを心より願っています。